

## はじめに

高橋宏幸さんは本年3月31日、京都大学大学院文学研究科・文学部を定年により退職される。高橋さんは学生として9年、助手として2年、京都工芸繊維大学勤務の7年を経て、戻って助教授・教授として27年、京都大学文学部に在ることは38年の長きにわたる。その間の多彩な研究成果は業績目録の示すところであるが、私はこの機を借りて、年下の頼れる同僚として講座の伝統を守り、学会運営の重責を果たしてきてくださった高橋さんにまず感謝の意を表したい。

日本における西洋古典学の種はラファエル・ケーベル博士（1848-1923）によって播かれたと言われる。ケーベル博士は東京帝国大学文科大学の外人教師として1893年から21年間にわたり哲学・美学を講じる傍ら、大学との契約外でギリシア・ラテンの言語と文学を教えたが、1914年8月、退職して帰国する直前に第一次世界大戦が勃発して出国の機を失い、横浜にて客死するまで愛弟子たちに囲まれて過ごした。そのケーベル博士の薫陶を受けた田中秀央先生（1886-1974）が1920年に京都帝国大学文学部言語学講座に着任、西洋文学第二講座（英文学配当）と梵語学梵文学講座を分担しつつギリシア語ラテン語の研究教育で実績をあげ、1938年、名称は西洋文学第二講座ながら事実上我が国最初の西洋古典専門講座を開設することを認められた。1953年、これが正式に西洋古典語学西洋古典文学講座として文部省より認可されると、田中秀央門下の松平千秋先生（1915-2006）が初代の講座主任となり、その高弟岡道男先生（1931-2000）が後を継ぎ、松平先生と岡先生の教えを受けた私が三代目となった。しかし私には学統を継ぐ力なく非抛の思いが深かったので、同じく松平先生と岡先生の薫陶を受けた高橋さんを助教授に招くことで、漸く私は安んじて定年までの任期を全うすることができた。

岡先生の学問と精神を最もよく受け継ぐのは高橋さんである。高橋さんの初期の論文がプロペルティウスの恋愛エレゲイアに集中するのは、岡先生のラテン恋愛詩講義の影響によるところが大きい。岡先生がウェルギリウス『アエネーイス』第三歌までの訳稿を遺して簀を易えられた時、後を託された高橋さんは、先生の『アエネーイス』演習における教えの数々を翻訳に注ぎこむことを心がけた。プロペルティウスに始まる神話への高橋さんの関心は、オウィディウスの神話三部作ともいふべき『祭暦』『ヘーローイデス（女性たちのギリシア神話）』『変身物語』の完訳と著書『ギリシア神話を学ぶ人のために』に繋がるが、初期にはオウィディウスの恋愛詩も扱っているので、私は高橋さんを詩の人かと思っていた。ところが今顧みると、キケローやセネカの哲学書と書簡、それに何よりカエサル全著作を訳出するなど、散文のお仕事も同じように多い。

岡先生の精神と言ったのには二つの面があり、一つは穏やかで謙虚な人柄に関するこ

と、一つは *humanitas* (人文学) の源流としてのギリシア・ラテン文学を総体として学ぶ心構えのことである。ラテン文学草創期のプラウトゥス喜劇から黄金時代韻文の最高峰ウェルギリウス、散文の規範キケローとカエサル、白銀時代のセネカを経てシーリウス・イタリクスの歴史叙事詩まで、高橋さんの研究はラテン文学の高峰全てを覆うが、そればかりではない。高橋論文はたとえ一篇の詩を扱う場合でも、詩の構造解釈から詩人の全体像に説き及び、更にはギリシア文学を受け継ぎ乗り越えようとするラテン文学の宿命にも思いを致す。

高橋さんはユーモアの感覚も豊かだが、それを表に出さぬ含羞の人である。論文の構想の中に、あるいは厳密で端正な訳文の中に遊びのようなものを忍ばせて読者を楽しませてくれることもある。学生の指導については、私がとりわけ感銘を受けることがある。優れた修士論文を書きながら大学に残らぬ学生に対し、協力して論文に彫琢を加え、学術誌への掲載まで支援することである。学生は論文発表という生涯の思い出を持って大学を去ったことになる。

高橋さんと私とで教室を運営する時期に、西洋古典学の本場との繋がりを強化しようと、セント・アンドルーズからエリザベス・クレイク教授を、スロヴァキアからマルティン・チエシュコ准教授を招いた。今はこのお二人も退職され、高橋さんは若い世代に後事を託して定年を迎えられる。高橋さんには日本西洋古典学会委員長として引き続き学会を指導していただかねばならないが、田中秀央先生着任から百年を超えるこの教室をも見守ってくださるようお願いしたいと思う。

2022年1月 中務哲郎